

# 希少猛禽類の把握手法に関する調査

## Study on methods for monitoring rare raptors

(研究期間 平成 10～14 年度)

環境研究部・緑化生態研究室  
Environment. Department, Head  
Landscape & Ecology Division

室長 藤原宣夫  
Nobuo Fujiwara  
主任研究官 石坂健彦  
Senior Researcher Takehiko Ishizaka  
研究官 百瀬浩  
Researcher Hiroshi Momose

We monitored the nesting activities of five raptors in Nagano prefecture, central Honshu. In northern goshawks (*Accipiter gentilis*) and grey-faced buzzard eagles (*Butastur indicus*), both sexes visited the nest, but in northern goshawks, the female visited the nest much more frequently than males. Comparison of the food diet revealed an interesting tendencies. In common buzzard (*Buteo buteo*), more than 90% of the foods were mammals. Northern goshawks mostly brought birds. The black kite (*Milvus migrans*) was mainly dependent on fish. In oriental honey buzzards (*Pernis ptilorhynchus*), more than 60% were insects. However, Grey-faced buzzard eagles had a more varied diet of amphibians, reptiles, mammals and insects.

### [研究目的及び経緯]

本研究は、オオタカを始めとする希少猛禽類の生態を調査して、生息環境条件、行動圏の広さや行動圏内の環境利用を明らかにし、希少猛禽類の調査・保全手法や、事業実施に際しての保全手法の検討に役立つ資料を得ようとするものである。

### [研究内容]

平成 14 年度は、希少猛禽類の調査・保全手法の効率化を検討するに際して考慮すべき生態を解明するため、ビデオカメラにより巣内の状況を撮影し、猛禽類の繁殖生態を明らかにした。

### [研究方法]

長野県内 2 地域の猛禽類（オオタカ、サシバ、ハチクマ、ノスリ、トビ）の巣に小型カメラを設置し、造巣期（初卵日までをいう）、抱卵期（初卵日から雛が孵化する前日までをいう）、育雛期（孵化後から巣立ち日までをいう）にかけて（ハチクマ、ノスリ、トビは育雛期から） 4:00 から 19:00 まで撮影した映像を解析し、繁殖期の生態を究明することとした。

### [研究結果および考察]

ここでは、オオタカとサシバの巣への訪問回数と在巣時間、猛禽類各種の餌内容を映像から解析した結果について過年度の結果と合わせて報告する。以下、撮影した映像の内、解析可能な撮影時間を解析時間とする。

### 1. オオタカの訪問回数と季節変化

2000 年と 2001 年の訪問回数を解析時間で除した 1 時間当たりの回数を図 1 に示した。オオタカが前年繁殖した巣に姿を現すのは、両年とも 2 月に入ってからであった。2 月末から回数が増えるが、抱卵に入ると減少し、雛が孵化してから増加していた。孵化後から巣に訪れているのは雌で、雄はわずかであった。これは雄が運んできた餌を雌が巣外で受け取り、雌が巣に持ち込むためと考えられる。

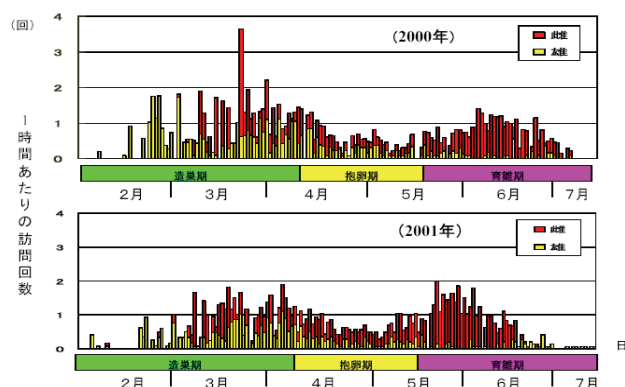


図1 オオタカの巣訪問回数の季節変化

### 2. オオタカの在巣時間の季節変動

解析時間に対する巣に留まっている時間の割合の変化を図 2 に示す。造巣期には、図 1 のように訪問回数

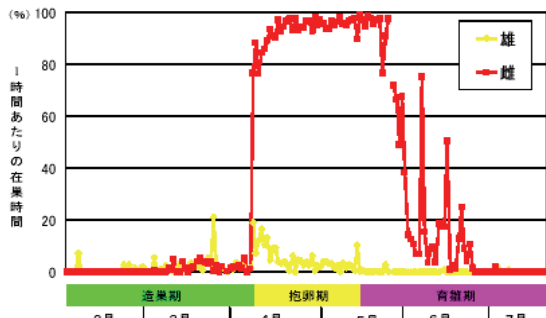


図2 オオタカの在巢時間の季節変化(2001年)

は多いが、滞在時間は解析時間の1割以下とわずかであり、産卵後は雌の滞在時間が急増していた。

### 3. サシバの訪問回数と季節変化

サシバについては、前年繁殖に成功した巣に翌年の渡来直前の3月末から巣立ちまでカメラを設置した。訪問回数を解析時間で除した1時間当たりの回数を図3に示す。4月上旬に渡来し、4月中旬から下旬にかけて、3個産卵した。雛は5月中旬から下旬にかけて孵化し、7月上旬にすべて巣立った。訪問回数は、巣造期には1時間あたりほぼ2回であったが、抱卵期には1回以下に減少した。雛が孵化すると急に増加するが、雛の成長とともに減少した。サシバの場合はオオタカと異なり、繁殖期を通じて雌雄ほぼ同じ割合で訪れていた。

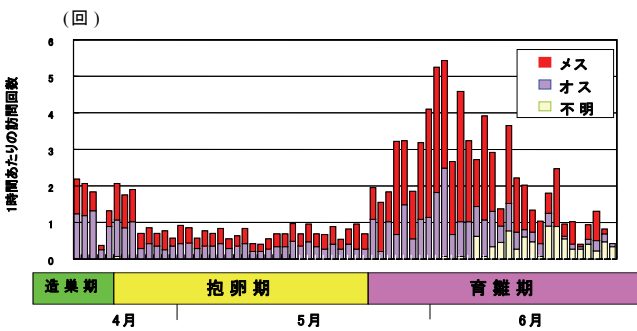


図3. サシバの訪問回数の季節変化(若種)

### 4. サシバの在巢時間の季節変動

解析時間に対する巣に留まっている時間の割合の変化を図4に示す。造巣期には滞在時間はわずかであるが、産卵後急増していた。抱卵は雌雄交代で行うため、抱卵期の滞在時間は雌雄共に高いが、雛が孵化して以降、雄は巣に餌を運んできて巣にほとんど滞在しなくなった。サシバはオオタカと比較すると雌雄がほぼ同じ割合で抱卵を行う点に大きな特徴がある。雛が孵化してからはオオタカと同様に雄はほとんど巣に留まらなくなった。

### 5. 猛禽類各種の育雛期の餌内容

猛禽類各種の育雛期の餌内容を図5に示す。ノスリ

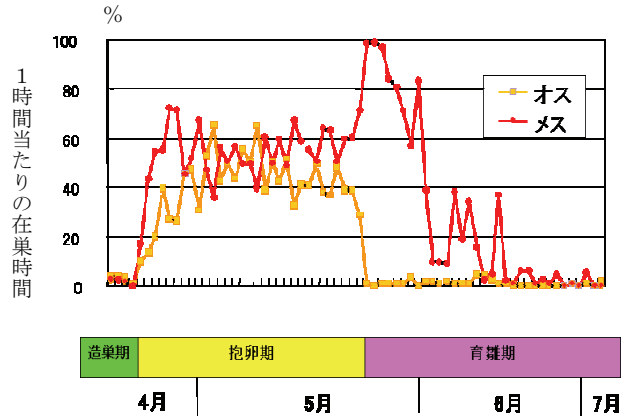


図4. サシバの在巢時間の季節変化(若種)

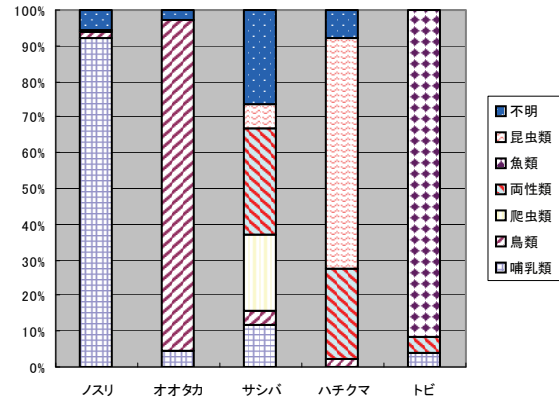


図5 里山の猛禽5種の巣に搬入された餌内容の比較

はネズミ類等の小型哺乳類、オオタカは鳥類、ハチクマは昆虫のハチ類、トビは魚類を主とした餌であった。サシバはカエル類等の両性類及び爬虫類を主に哺乳類、昆虫も餌としていた。このように里山に住む中型から大型の5種類の猛禽の間では、互いに主食とする餌がそれぞれ異なっていることにより、里山といった限られた環境でこれらの種が共存できているものと考えられた。

### 5. まとめ

以上のように今年度は猛禽類の巣への訪問、餌の内容等繁殖生態を明らかにした。猛禽類は肉食性の高次消費者であり、その生態を明らかにすることによりその地域の生態系の環境保全措置の検討に役立つものとする。今年度の結果からは、猛禽は種類によって巣の訪問期間、餌内容、生息する環境、営巣する環境が異なっていること等が明らかとなった。猛禽の保護にあたっては、個々の種の生態に応じた保護対策が必要となる。さらに猛禽の生態を解明していくことにより、調査の手法等が効率化されるものとする。